

■ 第12回『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』—スポーツの多様な見方、考え方—
～フットボールタウン神戸は、2019 ラグビーW 杯から始まる

スポーツへの関心・熱気の高まりをどう市民生活に結びつけていくか～

第2回「1本のトライは、五輪のメダルにも匹敵する喜び！」

～元日本代表の語る体験的ラグビー論～

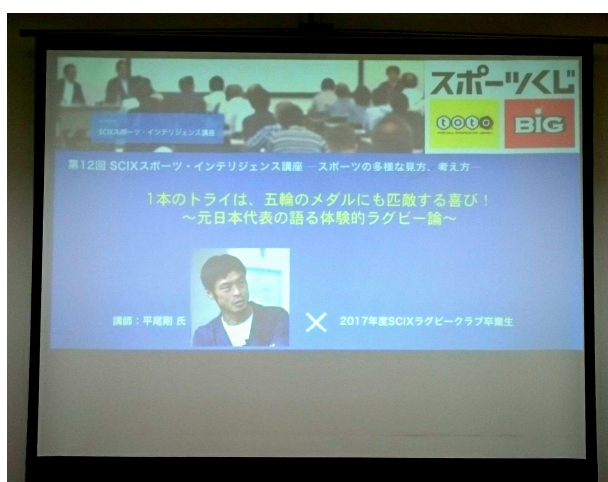
講師：平尾剛氏（神戸親和女子大学准教授 元ラグビー日本代表）

司会進行：美齊津二郎氏（SCIX 理事）

ゲスト：中川祐輝氏、福成真琴氏（2017 年度 SCIX ラグビークラブ卒業生）

日時：2018 年 7 月 21 日（土）18:30～20:00

会場：神戸国際会館セミナーハウス



スポーツ界の知見豊かな方々を講師にお招きし、スポーツの在り方や人材育成のポイントを学ぶ『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』。2018 年度 2 回目となる今回は、SCIX の講座やセミナーでおなじみの平尾剛氏を講師に迎え、「1本のトライは、五輪のメダルにも匹敵する喜び！～元日本代表の語る体験的ラグビー論」をテーマに語っていただきました。

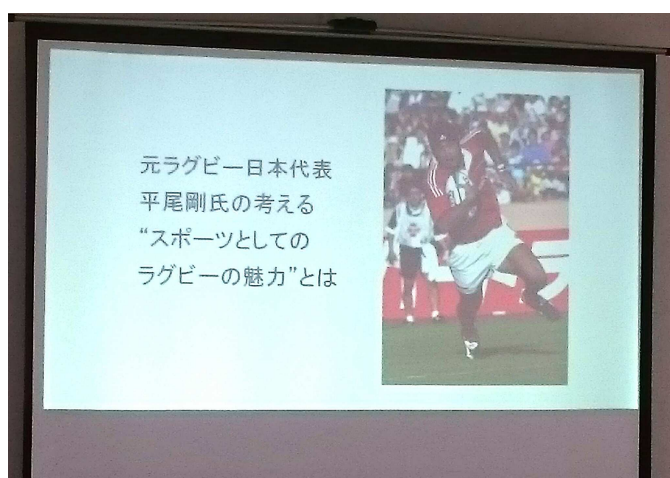
ラグビーの華といえばウイングのトライシーン。チームメイトが苦労してつない

だボールをバックスの両翼に位置するウイングプレイヤーが、懸命にゴールラインに迫りトライに持ち込む姿は、まさにラグビー精神の「One for all, All for one」を体現するプレーと言えるでしょう。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」というラグビー精神に内在する「献身や友情、勝利への渴望」をラグビー選手はどう受け止め、スポーツの魅力を見出しているのか？元ラグビー日本代表であり、SCIX ラグビークラブでのコーチ経験もある平尾氏。現在は神戸親和女子大学の准教授として活躍の場をピッチから教壇に移し、研究に勤しむ氏に、体験的ラグビー論を語っていただきました。

はじめに、今回の講座のタイトルにもなっている「1本のトライは、五輪のメダルにも匹敵する喜び」というフレーズについて裏話が披露されました。このフレーズ、とあるセミナーで平尾氏が実際発したものだ



そうで、セミナーを聴講していたスポーツジャーナリストの玉木氏から、その話を聞いた SCIX 理事・美齊津氏が、いつかこのフレーズをテーマに平尾氏に講座をしてもらおうと企画を温めていたのだとか。その話を受け、平尾氏がこのフレーズの意味するところを語ります。「こうは言いましたけど、僕は実際のところオリンピックのメダルを獲ったことはありません(笑)。ただ、自分自身のラグビー人生において正直記憶に残っているのは勝敗よりも、あの時のあのパス、一本のトライといった一つ一つのプレーなんです。いわゆる“ゾーン”と言われるようなシーン。その積み重ねで出来上がってるんですよね。観客もそういったシーンに盛り上がるのではないのでしょうか」。まさにこれぞラグビーの魅力であり、スポーツの魅力と言えるでしょう。



その後は、プロジェクターに映し出される映像に沿って、司会進行役の美齊津氏が質問を投げかけ、平尾氏がコメントという形で会は進行。6つのテーマ、キーワードを基に平尾氏の考えるラグビーの魅力を伝えていきます。

まず一つ目のキーワードとなるのが「多様性」。「ラグビーは『多様性』を重んじる」と。体重の重い軽い、背の大きい小さい、ぶつかる、かわす、

蹴るなど、選手15人がそれぞれの個性・適正に合ったポジションでプレーできるというラグビーの特性と同時に、その特性故の良さについて語られました。現役時代、バックスとして活躍した平尾氏。「ラグビーの第1列は経験者でないとこなせない、代えが利かないポジション、FWの戦力が相手と互角でないと勝負にならない」と言います。さらに「自分にできないポジションがあることで、自然と他のポジションの選手やチームメイトに対する敬意が生まれる」と。

二つ目のキーワードは「接触（コンタクト）」。ラグビーはコンタクトスポーツ。哲学的に、五感の中の「触覚」はコミュニケーションの原型とされていて、相手に触れることがコミュニケーションの基本なのだとか。身を寄せ合う「モール」はその最たるものと平尾氏。相手に押されながらも、みんなで力を合わせて進んでいく、何の掛け声をせずとも互いの気配などを察知して進む方向を変えたりするモールには、味方同士のコミュニケーションや対戦チームとの駆け引きなど、ラグビーの魅力が詰まっていると分析。

続く三つ目のキーワードは「献身」。ラグビーは「献身」のスポーツであり、「One for all, All for one」が伝えるチームプレーは自我からの脱却を意味すると持論を展開。自我の塊と言える園児のちびっこラグビーでは、パスの連携は見られず一人でボールを持って突っ走るのが通例。年齢が上がるにつれ「我が、我がではダメだ」ということに気づき、自我から解放され「One

for all, All for one」の精神が芽生えると平尾氏は言います。さらに、ラグビーは「犠牲」の上に成り立つスポーツとしばしば称されることに異議を唱え、「犠牲」ではなく「献身」であると強調しました。ここで、美齊津氏から SCIX 創設者である故・平尾誠二氏がかつて、「チームプレー」という言葉が好きではないと言っていたことを明かしました。「個が確立していないところにチームプレーは存在しない」という考え故の言葉だろうと説明します。「知らず知らずに、その平尾（誠二）イズムを受け継いでいる気がする」と平尾氏が亡き恩師への想いを吐露するシーンも見られました。

四つ目は「寛容」。ラグビーには、分断を避けるための「no side」の精神があります。敵味方関係無く、試合後互いを称えあい、握手やハグをする



るシーンは、まさにラグビーの精神「no side」を象徴します。以前は試合後、勝者と敗者がともに食事をし、健闘を称え、懇親を深めるという習慣もあったそうですし、秩父宮ラグビー場にお風呂が一つあったのも「no-side」を体現したものなのだとか。平尾氏自身もラグビーをする中で「勝ってはしゃぐのはダサい、負けてクサッたり卑下するのもダサいということを学んだ」と言います。また、もう一つ、「寛容」の意味するところとして、「ルールに残された余白がある」として、いわゆるアドバンテージルールについても言及しました。細かいミスがあっても流す、許す、ラグビーはまさしく「寛容」のスポーツであると。ラグビー初心者にとって、ラグビーのルールがわかりにくいとされる原因の一つと言われるのが、このアドバンテージルールですが、「寛容」と捉えると受け入れられやすくなるかもしれません。

五つ目は「判断」。試合中、監督はベンチに入れず指示を出せないのがラグビー。「ラグビーは選手の『判断』を尊重する。ゲーム中の判断がすべて。その場に立つ者だけが正確な判断を手繰り寄せることができる」と平尾氏。2015 ラグビーW 杯で歴史的な金星となった南ア戦での一幕を例にあげました。ファウルを獲得し、キック、スクラム、ラインアウトの選択肢がある中、キャプテンのマイケル・リーチ選手がスクラムを選択したことに監督のエディ・ジョーンズ氏が激怒。ところが、この選択、判断が歴史的な大勝利を導いたと言っても過言ではなく、エディ監督も、この判断を賞賛したという話。グラウンドレベルの選手の判断を尊重し、選手同士も個々の判断を尊重する、それがラグビー。

そして最後のキーワードは「ボールをつなぐ」。ラグビープレイヤーの喜びは、「ボールをつなぐ」に集約され、パスには人類学的叡智が凝縮されていると、神戸製鋼時代のエピソードを基

に語りました。「元木さん（現・京都産業大学ラグビー部 HC）からのパスの価値がはじめはわからなかった。なんでそんなとこに投げんねん？と。ところが、そのパスを取りに行こうとして取って初めて新たなパスの価値がわかった。パスをつなぐためにはコミュニケーションが不可欠。そこから試行錯誤が始まる。一本のパスをつなげることの難しさ、そしてパスがつながる面白さ。これこそがラグビーの真髄」。

日本代表経験者であり、研究者である平尾氏ならではの切り口と表現で、ラグビーの魅力を十分にうかがうことができました。



そして、ここからはゲストとして、2017 年度 SCIX ラグビークラブ卒業生のお二人にも加わっていただき、さらに会は進行。女子キャプテンの福成真琴氏、男子ヴァイスキャプテンの中川祐輝氏。学業とラグビーの両立を図り、見事この春、神戸大学に現役合格したお二人にもラグビーの魅力をうかがいました。

幼稚園の頃から地元のラグビースクールに通っていたという福成氏。幼い頃は男子より女子の方が発育も早く、身体も大きいことから、男子を置き去りにして走るのが快感だったと、ラグビーにハマった経緯を振り返ります。また、SCIX ラグビークラブについては、トップリーグ出身コーチによる確かな指導と、距離感の近さ、さらにラグビーに対して同じ想いを抱く女子メンバーたちとの出会いは大きな魅力と語ります。

一方、子どもの頃から身体が大きい方ではなかったという中川氏。「昔から大きい相手を倒すのが好きで、大きい相手から守りきった達成感が心地いい」とコメント。この発言に平尾氏から「根っからのラグビーマン。頼もしい」と賛辞が。さらに、合宿中、キレイにハマった忘れられないワンプレーがあったことと、SCIX での週二回という限られた練習時間が、結果的に「もっとやりたい！」という熱になり、大学でもラグビーを続けるに至ったように思うと中川氏は言います。

美齊津氏が、前段のテーマトークについての感想を求めると、福成氏は「多様性」、中川氏は「献身」の項に特に共感したと回答。多様性を表すポジション説明の動画が可愛いと、一時期、学生の間でその動画が流行ったというエピソードや、現役女子大生らしい感覚で改めて福成氏



が熱く語ります。中川氏はラグビーを評する「犠牲」という言葉にかねてから違和感があったそうですが、「献身」という表現にじっくりきたと納得した様子。その後も、キャプテンの役目や、2019 ラグビーW 杯認知度アップ策などについて話題は及び、現役大学生のフレッシュかつリアルな声を聞くことができました。2019 ラグビーW 杯開催のアナウンスや、ラグビー普及については、SNS や口コミなどによる地道な情報発信もちろん重要ですが、「（中川くん含め現役プレーヤーひとりひとりが）一所懸命プレーする姿、楽しそうにプレーする姿を見せることが何よりの普及活動になる」という平尾氏の言葉が非常に印象的でした。プレーヤーとしてラグビーを心から楽しんだ経験があり、今なおラグビーを愛し、ラグビーの魅力を伝え、発信する立場の平尾氏からの提言であり、願い、激励とも受け取れました。平尾氏、そして二人の若きゲストを迎えての第二回講座はこれにて閉幕しましたが、SCIX としても、2019 ラグビーW 杯日本開催にあたっての告知活動はもとより、普及、指導者育成など、スポーツ界の発展のために今後も活動していく所存です。今回もたくさんの方のご参加、誠にありがとうございました。

講座開始に際して冒頭、SCIX 事務局長・美齊津氏より大阪北部地震ならびに豪雨災害に対するお見舞いの言葉が述べられましたが、改めて災害に見舞われた被災者の皆様にお見舞い申し上げますと共に、少しでも早い復興をお祈り申し上げます。



次回、第3回の講座はひと月間を開けて、9月8日（土）の開催です。テーマは「ラグビーの持つ“多様性”“寛容”の精神を、どう日本のスポーツ文化に融合させるか～2019W 杯からの取り組み」。故・平尾誠二氏の同期である、京都工学院高校（旧・伏見工業高校）ラグビー部 GM の高崎利明氏と、男女7人制ラグビー日本代表総監督・男子セブンズ日本代表 HC の岩淵健輔氏

を講師に迎え開催いたします。まだまだ残暑とは言い難い暑さが続いているでしょうが、次回もご参加のほどよろしくお願いいたします。

（レポート 中野里美）

スポーツ振興くじ助成事業

